

教育実践の試み

—専門教育を通しての教養の教育—

岩田 泰夫

はじめに

現在、15年間にわたって社会福祉の現場でソーシャルワーカーとしてクライアントを援助し、その後、大学の教員として教育に従事し、15年が終わろうとしています。社会福祉実践と教育実践の2つの実践の経験が30年になるということです。

ここでは、私なりの教育の試みを述べ、皆様のご指導を受けたいと思います。

今までの授業を振り返ってみると、授業の方法は、1) 大学によって、2) 学生によって、3) 学生の人数によって、4) 演習か講義科目かなどの科目の性格によって、さらにはまた、私にとっては、5) 大学における社会福祉の位置づけによって、異なるように思います。

1. 授業での体験

まず、私の授業における個人的な教育の実践とその体験から述べてみよう。

現在のような授業のやり方は、以下の幾つかの体験によって形成されてきました。

まず第1は、社会福祉現場でソーシャルワーカーとして実践してきた体験によります。たとえば、クライアントの社会生活能力を強化しようとする実践体験です。まず、動機をつくり、主体的に体験をしてもらう。次に、その体験を検討する。そして、それをまた新たな動機として新たな体験に挑戦していただくという実践です。

第2は、650人規模の学生に対する授業の体験です。これには、いろいろな工夫をしました。たとえば、以下のような試みです。1) 教室内を動き廻る、2) 学生に質問し、頻繁に当てる、3) 多くの人々に当てる、4) 言葉だけではなくて、身体全体を使って表現する、5) 時には、演じる、6) 図や絵を多様し、7) 学生の体験している日常生活などにたとえて解説する、などです。

第3は、約200人の学生が履修している講義科目でしたが、社会人の学生が約1割から2割おられて、授業中に学生が、突然に「先生！ちがうよ」「私なら、こう思う」「これは、どういうことですか」などと言われた体験です。

当初は、大変に困りましたが、この体験によって、次のようなことを教えられました。1) まず第1は、「質問に答えられないことを恥ずかしがることはない」と考えられるようになり、2) また、私が答えをだしたり、教えるのではなくて、クラスが答えを発見していけばいいと考えられるようになり、これが、3) 私を大変に楽にさせてくれて、4) 授業への態度も変えさせ、5) 学生と一緒に協力しあって学んでいこう、6) 学生との関係もかえてくれ、7) さらに、今日はここまで進めたという結果ではなくて、一緒に勉強していく過程を大切にできる

ようなり、8) そのために、「最低限に必要な知識とは何か」を考えるようになり、知識を並列的にではなく、大切さにもとづいた同心円的な知識にまとめられるように努力してきたように思います。

第4には、「今日の授業は非常にうまくやれた」と思う時は、学生にとっては、よくないことが多いように思います。教師のペースは、少し早い。また、教えるスピードと学ぶスピードが異なるようです。それゆえに、教師が、戸惑いながら、悩みながら進めるのが、学生のペースになるのかなあとと思います。また、授業の内容としても、教師によって十分に整理され普遍化されている内容ではなくて、未整理の部分が残っている、いわば、ギクシャクし、そのままの生(なま)のことが残っているような内容をよりよく学ぶようです。もしそうであるのなら、そのように演じながら授業を進めるのがよいようです。さらに、何よりも一生懸命に学生の方を向いて、学生に伝えようとしていることが伝わるようです。

2. 授業の目的

次に、授業の目的を述べてみよう。

私の授業では、社会福祉を学ぶことと、それを通して、以下の諸点を学ぶことを目的にしています。たとえば、児童虐待を学ぶとする。それには、1)「児童虐待とは何か」を学ぶとともに、2) それを通して、「社会福祉とは何か」を学ぶ。また、3)「人間とは何か」を知る。4) 自分の弱さを知り、5) 考える力を養う、などなどです。

さらに、今少し詳しく列記してみますと、以下となります。

- 1) 主体的に学習する。
- 2) 関係づけと関係づける力の強化
 - ①自分の日常の生活体験との関係づけ
 - ②自分と社会(仕組)との関係づけ
 - ③自分と精神障害者との関係づけ
 - ④自分とクラスメイトとの関係づけ
 - ⑤他の専門分野の科目と関係づけ

たとえば、「話す」は「放す」ということばの語源を学び、「話す」と言うことばの意味の理解を深めます。また、社会学の概念である「予言の自己成就」を活用できるようになります。

- 3) 社会福祉の視点でものごとをみられるようになったり、検討できるようになります。
- 4) 自分の知識にできる。自分の「個人的な知識」にまで高められるようになります。
- 5) 援助技能の修得です。
- 6) 自分を発見します。自分をみつけられるようになります。
- 7) また同時に、自分なりの体験を積み重ねた時に分かるような教育をも目指す「悟りの学び」です。

3. 教育の課題と教育方法の実際

では、それがなされるための課題は何か？

ここで、それぞれの課題を列記し、それに対する実際的な方法を示してみよう。

1) 学生をプロシューマーにする

学生は、学ぶ人であり、また同時に、教える人です。特に、受け身になって教えられる人になるのではなくて、主体的に教える人にします。これによって、クラスの中で役割を得るばかりか、授業に主体的に参加するようになります。

たとえば、1) 自分の知識を活用して、自分の言葉で意見を言う機会をふやす、2) ミニテストなどの採点は、隣の学生が評価し、訂正するし、3) 学生に授業もしてもらう。

2) 授業への動機づけと目的を作る～必要は学習の母なり～

授業への動機づけをつくります。「これはどういうことなのか」と不思議に思ったり、疑問に思う体験によってはじめて調べ、学びたくなります。学習の動機づけとなります。まずはじめに疑問や驚きがありき、です。

たとえば、ビデオなどをみてもらう。視覚に訴えます。驚いてもらう。動機づけをつくって、関心をもってもらう。ビデオや事例などの具体的なものから始めます。

また、見学実習などもおこないます。見学実習によって、次のような諸点を学ぶことができます。1) 学習の動機づけです。主体性を高めてもらう。自分が何ができて、何ができないのかなどの学習の必要性に直面してもらう、2) 大学の講義内容がどういう現場の実践から生まれてきているのかを知ってもらう、3) 知識などがどのように活用されているのかなどを実際を体験する、4) 現場と大学との講義内容とを関係づける、などです。

その際に、上記の目的を達成するためには、「2人の患者さんと雑談してくる」などの具体的な課題を示す必要があります。

なお、川村暁雄先生によれば、人には、体験してから知識を学ぶ学び方と、その反対に、知識を学んで枠組みをもってから体験する学び方の2つの学習のパターンがある、と言われます。言い換えれば、参加し、体験しながら「内側」から理解していく学習と、観察し評価し「外側」から理解していく学習があるということです。

3) 個人的な知識にまで高めてもらう

自分の体験などと練り合わせて自分の知識にまで深く理解し、自分の個人的な知識として活用できるようになってもらう。

そのためには、「最大限の知識ではなくて、最低限で必要な知識」を提供するようにします。意見を言うためには、知識が必要ではありますが、知識が多過ぎると、知識を自分のものにして意見をいいにくくなったり、教えてもらうという受け身の構えができてしまって意見を言う

ことができにくくなるからです。

それも、重要で大切で必要な知識を軸にした同心円的な知識を提供できれば、素晴らしい。

また、関係づけることと、その関係づけの方法を学ぶ必要があります。そのためには、

1) 日常生活とその体験を教材に選ぶ、2) 日常生活とその体験を活用して解説をおこなう。

また、核心を学べるように、1) 図や絵を使って説明したり、2) 重要な諸点は何度も何度も繰り返し伝えるようにします。

4) 自分で考えてもらう

自分で創造的に考えてもらう。たとえば、試験問題でも考える問題を出します。「携帯電話が普及し、個人が電話をもつようになってきました。そこで、問題です。携帯電話がもたらした個人および地域社会への影響を地域福祉の観点から述べなさい」「優先座席が設けられてきましたが、ノーマライゼーションの原理の観点から優先座席の長所と短所を述べなさい」などです。

また、レポートでは、テーマを決めて提出してもらいます。自分なりの視点（切り口）でレポートを書いてもらいます。

5) 目的と方法を一致させる

これは、教育の目的に一致させて授業ができるのか？さらに、教育の方法の中に目的を組み込んだ授業ができるのか？などです。

たとえば、「授業に主体的に参加してもらう」という目的をあげれば、学生に当てたら、学生が何かを話すまではいつまでも待つということなどです。時には、椅子をもちだして、椅子にすわってしっかり待ちます。

また、「知識よりは理解することを大切にする」というのであれば、テストでも知識の正確さよりは理解している点を評価する、ということです。

6) 目標の設定を明確にする

授業の目標を具体的に明確にすることができるかどうかです。

たとえば、人間福祉学入門の科目では、1) 社会福祉は自分にもかかわる、2) 日常生活と福祉との関係、3) 自分の価値（観）などを含む自己の覚知、4) 社会福祉を学ぼうと思った時には調べられるように文献などの検索の方法を修得する、などがあげられます。

7) 参加と観察の調和をとる

これは、言い換えれば、「楽しむ」と「記録」の調和です。授業に主体的に参加し、時には、主観化し、一体化し、時には、上記に反して、観察し、客観化し、ノートをとる。このような相反する課題を相反したまま受け入れて授業を進めていくには、以下の3点での調和が必要になります。

①参加と観察の調和

②知識の蓄積と知識の活用の調和

③知識と体験の調和

しかも、授業の科目の性格を熟知し、それぞれの学びを生かしていく必要があります。

8) 個別化する

個別化には、学生一人ひとりを顔がみえるように個別化することと、一つひとつのクラスを個別化するという2つの個別化があります。

学生一人ひとりの学びを大切にするとともに、クラスにクラスの目標などを伝える必要があります。クラスのテーブルの上に目標を置き、提案がみえるようにします。そうすれば、クラスが考え、クラスがこたえを出せます。また、それぞれのクラスにあったレジメを配布していきます。そうしていると、3年経つと、新しいテキストが誕生します。

4. それぞれの授業での実践

次に、それぞれの授業の科目でどのように授業が進められているのかを紹介しておきましょう。

1) 専攻ゼミⅠと専攻ゼミⅡ

毎回、学生によって授業が進められます。学生の関心に基づいて順番に司会や書記、報告者などの役割を担っています。権限ももっています。したがって、学生の司会者が私を当てて、意見を求めてもきます。

この授業では、学生が意見を言うことに価値が置かれます。そこで、私は、学生の知識の誤りを訂正することはしないようにします。知識の正確さよりは意見を言い、議論されることが大切にされます。

また、それがなされるように、クラスの一体化や、共同体づくりにも励みます。主体的な参加と、学び合い、協力、役割を担うなどです。

たとえば、専攻ゼミでは、学生は、会計、書記、委員長などの役割を担います。全員が何らかの役割を担います。クラスの中で役割があるというのは、クラスに受け入れられている証ですといわれます。さらにまた、これらの役割は、卒業後も続きます。たとえば、卒業後も新しい名簿が届けられます。その他、クラスが一体化するために、1) ゼミ旅行や食事会の開催、2) 学会などに一緒に行ったり、学会や学会誌と一緒に発表したりします。

2) 卒業論文のクラス

卒業論文のクラスでは、それはまた、専攻ゼミⅡのクラスになりますが、以下のように学び合えるようにしたいと考えています。クラスを形成できるようにと考えています。

以下、その過程をみてみましょう。

1) 私がAさんに伝えます。

- 2) Aさんが、まず学びます。
- 3) それを聴いているBさんが、学びます。
- 4) Bさんにききます。「Aさんはどんなことを学んだと思いますか?」。しかし、これにこたえられない場合には、もう一度、最初からAさんとやりとりすることになります。
- 5) 「Bさん、あなたの場合では、それは、どういうことになりますか?」とさらにききます。
- 6) Bさんは「私の場合には、こうです」とこたえます。
- 7) そして、私は言う。それぞれはテーマが異なりますが、学ぶことは、同じかもしれません。違うけれど同じ。同じだけれど違う、なのでしょう。
- 8) こうして、クラスができあがっていきます。教師と学生の一方向が、両方向になり、そして、ひとつの相互作用をクラス全員が学び合うという「面」、すなわちクラスが形成されます。

なお、それがなされるための要件を列記しておきますと、以下ようになります。1) 学生が同じ課題(たとえば、卒論を書く)、2) 同じ課題を有していることを相互に理解し、3) 学生同士が同じような作業を同時にしており、4) 私(学生)とクラスのAさんとを一定程度に関係づけられるようになっていて、5) クラスとしてのまとまりがある、などです。

3) 講義科目

講義科目の場合にも同じようにクラスを形成していこうとしますが、学生の人数が多くなると体験してもらったり、知識を活用できるように支援することは難しくなります。

繰り返しになりますが、学生を如何に巻き込むか、あるいは、学生に教師である私が如何に巻き込まれるかを考えて授業を進めます。

5. 講義科目での実際の授業の場面

では、どのように授業がなされているのでしょうか。

ここでは、講義科目のなかで、1) クラスがこたえをみつけていく過程と、2) 自分で授業計画を作成する、の2つのテーマへの実践をみていきましょう。

1) 人間福祉学入門の講義科目では

学生にどんどん当てて質問する。たとえば、「日本の精神科の医療機関の病床数はどれくらいですか?」と質問する。「10万」。「あなたは、どう思う?」・・・。「では、10万人よりは多いと思う人、手を挙げてください」・・・。「多いと思っている人が多いですね。では、多いと思っているあなたは、どれくらいの病床数と思っているのですか?」と次々にこたえてもらう。そして、また、「それより多いと思っている人、手を挙げて下さい」と続け、しばっていきます。

こたえが返ってこない場合には、ヒントを与えます。たとえば、「日本の人口はどれくらいでしょうか?」などとききます。「1億2千万」。「だとしたら、医療機関の病床数は?」などと

その学生に再び質問をします。

そして、34万病床と定まります。そこで、また、質問をします。〈34万病床というのは、どう思いますか？〉〈医療機関全体のベット数の20数%ですよ〉「あまりにも多いのにびっくりしました」。〈では、多いのに、少なく思う理由はどこにあるのでしょうかね〉とさらにきく。「わかりません」と言う。

そこで、テニスのラケットを持っている学生がいるので、〈あなたは、テニスをするの？〉ときく。〈いつから始めたの〉「大学生になってからはじめました」〈テニスをはじめてみると、何か世界の見え方に変化が起きましたか？〉「ええ、今まで気がつかなかったテニスコートなどが目にはいるようになりました」〈すごいね。今までみえていたけれど、見ていなかったものがみえるようになったということですネ〉「ええ、……」〈すごい発見ですね〉。

〈今のAさんの体験のように、関心をもつことによってものごとが見えるようになったということから考えて、精神科の病床数は、少なく考えていたが、実際は34万病床もあることに当てはめて考えると、どうなるでしょうか〉などとさらにきいていきます。

さて、長々と実際の授業の場面を描写してきましたが、このような授業の目的は、以下にあります。

まず第1は、質問すると、クラスやクラスの人々は、質問にこたえる必要性に直面します。直面すると、考えます。こたえをみつけようとします。さらに、質問されますから、さらに、考えます。それも、クラスの人々の考えも知ります。さらに、クラスが考えるようになり、クラスのこたえが導かれていきます。

第2は、自分の考えをみつけていく方法を知ります。

第3は、こたえを発見していくプロセスを体験します。

第4は、分かち合いの体験をします。

第5は、自分とクラスの人々との関係づけができるようになります。

第6は、そのような体験とともに、精神障害者の置かれている状況を理解したり、精神保健福祉の現状をわかります。

第7は、人間は、自分がみたいものをみようとすることを体験も含めて理解します。

第8は、自分や自分の生活の点検もします。

2) 専門科目（ケースワーク）では

次は、専門科目の授業をみてみましょう。

たとえば、クライアントとの面接の方法を学習する科目などでは、次のようなオリエンテーションをおこないます。

まず、学生のAさんに面接をやってもらいます。そして、Aさんに質問をします。まず、〈自分でよかったと思った点はどこですか〉〈次に、どうでしたか？〉〈何ができましたか？〉〈どのような面接をしたいと思いますか？〉。

また、Aさんの面接をみているクラスの学生にききます。〈今の面接のどこがよかったです

か) <どう思いましたか?>。

そのうえで、さらに、実際に、私が面接をしてみます。

そして、さらに、<どのような面接ができるようになりたいですか?> <1年後にどのような面接をしたいですか?> <何が課題となりましたか?> などときいていきます。

さて、以下、ここでの授業の目的を列記しておきましょう。

- 1) 何が教えられるのかを明確化します。
- 2) 自分が何ができ何ができないかの現状を自分で具体的に理解します。
- 3) 理想のモデルを知ります。
- 4) どうしたいのかを理解します。自分の課題を少しづつみえるようにしていきます。
- 5) 目標を立てます。

オリエンテーションの目標は、自分で自分の学習計画を立てられるようにすることです。教師が作成したシラバスではなくて、自分が自分のためにシラバスを作成していくことにあります。動機や目的、課題、内容などの授業の計画を作成します。

また、こうすることによって、授業の科目という枠のなかではありますが、自分が何に価値をおいているのか、自分のなかにどのような学習計画があるのかを発見していきます。自分を発見する作業と、それに基づいて処方箋を作成できるようになります。

おわりに

最後に、今後の課題を示しておきます。

第1は、この授業を履修したら、このような諸点が修得されるというような具体的な目標を設定し、それにもとづいて授業の計画を立てます。そして、授業をし、その目標の到達度にもとづいて評価します。学生と一緒に授業を評価します。しかも、これらをシラバスに明記しておくようにします。

第2は、学生の学生自身による自己評価などを加えた評価などの導入です。

少なくとも、学生が自分を評価し、自分をみつめる機会を作る必要があります。自己評価の項目は、次の4点です。1) 今回のテストの成績、2) 授業中の態度などの授業への取り組み、3) 自宅などでの学習時間など、4) 総合点、です。それぞれに関して、点数とその理由を書いてもらいます。

なお、本来、授業の評価は、以下の5点での評価の総合でなされる必要があります。1) 学生の自分の学習の評価、2) 学生の授業の評価、3) 教師による学生の学習への評価、4) 教師自身による自分の授業の評価、5) 授業そのものの授業目標への到達度の評価、の5点です。

第3は、大学全体としての教育の目標やルールなどに関する具体的な諸点での一致がなされ、実行できるのか、などなどがありましよう。これは、特に、目標ではなくて、実行力が問われます。

以上、ありがとうございました。